

上中下を知り、或はとこまわり或は戸障子或は敷居鴨居天井以下、夫々に遣ひてあしきは根太をはらせ、猶悪きにはくさびをけつらせ、人を見分て遣へば、其はか行て手際よきもの也、果敢の行き手際よきを云ふ所、物毎をゆるさざる事たいうゆる知事、氣の上中下を知る事、いさみを付ると云事、むたいを知るといふ事、箇様の事共統領の心持に有事也、兵法の利かくのごとし、

一兵法の道 士卒たる者は、大工にして手つから其道具をとき、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持、統領云付る所をうけ柱かやうりやう共てうのにてけつり、とこだなをもかんなにてけつり、すかし物ほり、物をもして、よくかねを糺し、すみく、めんどう迄も、手際能く仕立る所大工の

法也、大工のわざ手にかけて能くしおほへ、すみかねを能知りて後は、統領となる者也、大工のたしなみ能きる、道具を持、透々にとく事肝要也、其道具をとつてみづし書棚机卓又はあんとんまないた鍋のふた迄も、達者にする所大工の專なり、士卒たる者このごとく也、能々吟味有べし、大工のたしなみひすまざる事、とめをあはする事、かんなにて能くけつる事、すみかゝざる事、後にひすかさる事肝要也、此道を學ばんと思はゞ、書顯す所のことく、心に心を入れて能吟味有べきもの也、

一此兵法の書五卷に仕立る事 五ツの道を分ち、一まき一まきにして其利を知らしめんが爲に、地水火風空として、五卷に書顯す也、地の卷に於ては兵法の道の大體、我一流の見



立、劔術一通にしては、まことの道を得がたし、大きな所よりちいさき所を知り、浅きより深きに至る、直なる道の地形を引ならすによつて、初を地の巻と名付也、第二水の巻、水の本として心も水になる也、水は方圓のうつわものに随ひ、一滴と也、さう海となる、水に碧潭の色有り、清き所を用ひて一流の事を此巻に書顯す也、劔術一通の理さだかに見分け、一人の敵に自由に勝時は、世界の人に皆勝所也、人に勝と云心は、千萬の敵にも同意也、將たる者の兵法ちいさきを大きになす事、尺のかたを以て大佛をたつるに同じ、箇様の義こまやかに書分がたし、一を以て萬を知る事、兵法の利也、一流の事此水の巻に書しるす也、第三火の巻、此巻に戦の事を書記也、火は大小となり、けやけき心有によつて、合戦の事を書

也、合戦の道一人と一人との戦ひも、萬と萬との戦ひも同じ道也、心を大きな事になし、心を小さくなして、能く吟味して見るべし、大きな所は見えやすし、小さき所は見えがたし、其子細大人數の事は即座にもとをりがたし、一人の事は心一つにてかわる事はやきに、よつて、小さき所知る事得がたし、能吟味有べし、此火の巻の事は、やき問のことなるによつて、日々に手馴常の如く思ひ、心のかわらぬ所兵法の肝要也、然るによつて、戦勝負の所を火の巻に書顯す也、第四風の巻、此巻を風の巻とする事、我一流の事にはあらず、世の中の兵法其流々の事を書載する所也、風と云に於ては昔の風の風其家々の風などとあれば、世間の兵法其流々のしわざをさだかに書顯す、是風也、他の事を能知らずしては、自の



わきまへ成がたし、道々事々をおこなふに、外道と云ふ心有り、日々に其道を勤むると云ふ共、心のそむけは其身のよき道と思ふ共、直なる所より見れば、實の道には有らず、實の道をきわめざれば、少心のゆがみに付て後には、大きにゆがむもの也、吟味すべし、他の兵法劔術ばかりと世に思ふ事尤也、我兵法の利わざに於ても、各別の儀也、世間の兵法を知しめん爲に、風の巻として他流の事を書顯す也、第五空の巻、此巻空と書顯す事、空と云ひ出すよりしては、何をか奥と云、何をか口といはん、道理を得ては道理をはなれ、兵法の道におのれと自由ありて、おのれと奇特をす、時にあいてはひやうしを知り、自ら打自あたる、是皆空の道也、おのずと實の道に入事を空の巻にして、書とゞむるもの也、

一此一流二刀と名付る事 二刀と云出す所、武士は將卒共にちきに二刀を腰に付る役也、昔は太刀刀と云、今は刀脇差と云、武士たる者の此兩腰を持事、こまかに書顯すに及ばず、我朝に於てあるもあらぬも腰におぶ事、武士の道也、此二つの利をあらしめん爲に、二刀一流と云也、鎗長刀よりしては、外の物と云て、武道具の内也、一流の道初心の者に於て、太刀刀兩手に持て、道を仕習ふ事實の所也、一命を捨る時は、道具を残さず役に立たきもの也、道具を役に立てず、腰に納めて死する事、本意に有べからず、然共兩手に物を持事、左右共に自由には叶ひかたし、太刀を片手に取習せん爲なり、鎗長刀大道具は是非に及ばず、刀脇差に於ては、いづれも片手にて持道具也、太刀を兩手にて持てあしき事、馬上にてあし、か



一六〇  
 け走る時あし、沼いけ石原さかしき道人こみにあしく、左  
 に弓鎧を持、其外何れの道具を持ても、みな片手にて太刀を  
 つかふものなれば、兩手に太刀を構ゆる事實の道に非ず、若  
 片手にて打ころしがたき時は、兩手にても打とむべし、手間  
 の入る事にも有べからず、先片手にて太刀を振り習はん  
 爲に、二刀として太刀を片手にて振覺ゆる道也、人毎に初て  
 とる時は、太刀おもくて振廻しがたきものなれ共、萬初めて  
 とり付時は、弓も引がたし、長刀も振りかたし、いづれも其道  
 具々々になれては、弓も力つよくなり、太刀も振つけぬれば、  
 道の力を得て、振よくなるなり、太刀の道と云事、はやくふる  
 に非ず、第二水の巻にて知るへし、太刀はひろき所にて振り、  
 脇差はせまき所にて振事、先道の本意也、此一流に於て長き

にても勝、短かきにても勝、故によつて太刀の寸を定めず、何  
 にても勝事を得る心一流の道也、太刀一ツ持たるよりも二  
 ツ持てよき所、大勢を一人して、戦ふ時、又とり籠り者などの  
 時によき事有、箇様之義今委しく書顯すに及ばず、一を以て  
 萬を知るべし、兵法の道行ひ得ては、一ツも見えずと云事な  
 し、能々吟味有べき也、  
 一兵法二ツの字の利を知事、此道に於て、太刀を振得たる  
 者を兵法者と世に言傳へたり、武藝の道に至て、弓を能く射  
 れば射手と云、鐵炮を得たる者は、鐵炮打と云ふ、鎧を遣ひ得  
 ては鎧遣と云ひ、長刀を覺えては長刀遣と云ふ、然るに於て  
 は太刀の道を覺えたる者を、太刀遣脇差遣といはん事也、弓  
 鐵炮鎧長刀皆是武家の道具なれば、いづれも兵法の道也、然



共太刀よりして兵法と云事道理也、太刀の徳よりして世を納め身を納る事なれば、太刀は道法のおわる所也、太刀の徳を得ては、一人して十人に勝事也、一人にして十人に勝なれば百人して千人に勝、千人にして萬人に勝、然るによつて我一流の兵法に、一人も萬人も同じ事にして、武士の法を殘らず兵法と云所也、道に於て儒者佛者數寄者あつけ者亂舞者、此等の事は武士の道にはなし、其道に有らざると云ふ共、道を廣く知れば、物事に出あふ事なり、何れも人間に於て、我道くを能みかく事肝要也、

一兵法に武具の利を知ると云事 武道具の利をわきまゆるに、何れの道具にても、おりにふれ時にしたかひ出合もの也、脇差は座のせまき所、敵の身ぎわへよりて其利多し、太刀

は何れの所にても、大形出合ふ利有り、長刀は戰場にては鎧におとる心有、鎧は先手なり、長刀は後手也、同じ位のまなびにしては、鎧は少し強く、鎧長刀も事によりつまりたる所にては其利少し、取籠り者などにも然るべからず、只戰場の道具なるべし、合戦の場にしては肝要の道具なり、され共座敷にての利をおほへこまやかに思ひ實の道を忘るゝに於ては、出合がたるべし、弓は合戦の場にてかけひきにも出合、鎧わき其外物きわくにてはやく取合するものなれば、野相の合戦などにとりわきよき物也、城攻など又敵相二十間をこへては不足なるもの也、當世に於ては弓は申に及ばず、諸藝花多して實少なし、左様の藝能は肝要の時役に立たし、其利多し、城廓の内にしては鐵炮にしく事なし、野相などに



ても合戦のはじまらぬうちは其利多し、戦はじまりては不足なるべし、弓の一の徳は放つ矢人の目に見えてよし、鐵炮の玉は目に見えざる所不足也、此儀能々吟味有べき也、馬の事つよくこたへてくせなき事肝要也、總て武道具につけ、馬も大形にありき、刀脇差も大形にきれ、鎗長刀も大形にとほり、弓鐵炮もつよくそこねざる様に有べし、道具以下にも、かたわけてすく事有べからず、あまりたる事はたらぬと同じ事也、人まねをせずとも、我身に隨ひ武道具は手にあふ様に有べし、將卒共に物にすき物を嫌ふ事悪し、工夫肝要也、一兵法の拍子の事、物毎に付拍子は有る物なれ共、とりわけ兵法の拍子鍛煉なくては及がたき所也、世の中の拍子あらはれて有事、亂筆の道れい人管絃の拍子など、是皆能あふ

所のろくなる拍子也、武藝の道にわたつて、弓を射鐵炮を放馬に乗る事迄も、拍子調子は有り、諸藝諸能に至ても、拍子をそよく事は有るべからず、又空なる事に於ても拍子は有り、武士の身の上にして奉公に身をしあぐる拍子、しさぐる拍子、筈のあふ筈のちがふ拍子有、或は商の道分限になる拍子、分限にても其たゆる拍子、道々に付けて拍子の相違有事也、物毎のさかゆる拍子おとろふる拍子、能々分別すべし、兵法の拍子に於て様々有事也、先あふ拍子を知つて、ちがふ拍子を辨へ、大小遅速の拍子の中にも、あたる拍子を知り、間の拍子を知り、背く拍子を知る事兵法の專也、此背く拍子辨へ得ずしては、兵法たしかならざる事也、兵法の戦に其敵の拍子を知り、敵の思ひよらざる拍子を以て、空の拍子を智恵



の拍子より發して勝所也、何れの卷にも拍子の事を專書記也、其書付の吟味をして、能々鍛煉すべきもの也、

右一流の兵法の道、朝なく夕なく勤め行ふによつて、自ら廣き心になつて、多分一分の兵法として、世に傳ふる所、初て書顯す事、地水火風空是五卷也、我兵法を學ばんと思ふ人は、道を行ふ法有り、第一によこしまになき事を思ふ所、第二に道の鍛煉する所、第三に諸藝にさわる所、第四に諸職の道を知事、第五に物毎の損徳を辨ゆる事、第六に諸事目利を仕覺る事、第七に目に見えぬ所をさとつて知る事、第八にわづかなる事にも氣を付る事、第九に役に立ぬ事をせざる事、大形如此理を心に懸て、兵法の道鍛煉すべき也、此道に限て、直なる所を廣く見立ざれば、兵法の達者とは成がたし、此法を

學び得ては、一身にして二十三十の敵にも負べき道にあらず、先氣に兵法をたへさず、直なる道を勤ては、手にて打勝目に見る事も人に勝ち、又鍛煉を以て總體自由なれば、身よりも人に勝ち、又此道になれたるなれば、心を以ても人に勝ち、此所に至ては、いかにとして人にまくる道有んや、又大きなる兵法にしては、善人をもつ事に勝、人數を遣ふ事に勝、身を正しく行ふ道に勝、國を治る事に勝、民をやしなふ事に勝、世の例法をおこなふに勝、何れの道に於ても人に負ざる所を知りて、身をたすけ名をたすくる所、是兵法の道也、

正保二歲五月十二日

新免武藏

寺尾孫之丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延花押



山本源介殿  
水の巻

一六八

兵法二天一流の心 水を本として利方の法を行ふによつて、水の巻として一流の太刀筋、此書に書顯すもの也、此道いづれもこまやかに心の儘には書分がたし、縦ことはつゞかさざると云ふ共、利は自ら聞ゆべし、此書に書付たる所へことく一字々々にて思案すべし、大形に思ひては道のちがふ事多かるべし、兵法の利に於て一人と、一人との勝負の様に書付たる所なり共、萬人と萬人との合戦の利に、心得大きに見立所肝要也、此道に限つて少なり共道を見違へ、道の迷ひ有りては、悪道へ落るもの也、此書付計を見て兵法の道には及事に非ず、此書に書付たるを、我身にとつて書付を見ると

宮 本 武 藏

第九卷五輪水書

思はずならふと思はず、にせものにせずして則ち我心より見出したる利にして、常に其身になつて能々工夫すべし、一兵法心持の事 兵法の道に於て、心の持様は常の心に替る事なかれ、常にも兵法の時に少も替らずして、心を廣く直にして、きつくひつはらず、少もたるまず心のかたよらぬ様に心をまん中におきて、心を靜にゆるがせて、其ゆるぎのせつなもゆるきやまぬ様に、能々吟味すべし、靜なる時も心は靜ならず、何とはやき時も心は少もはやかからず、心は體につれず、體は心につれず、心に用心して、身は用心せず、心のたらぬ事なくして、心を少もあやまらさず、すへの心はよわく共、その心をつよく、心を人に見分られざる様にして、小身なるものは、心に大きな事を残らず知り、大身なるものは

一六九



心に小さき事を能知りて、大身も小身も心を直にして、我身のひいきをせざる様に、心を持事肝要也、心の内にこらす廣くして廣き所へ智慧を置べき也、智慧も心もひたとみがかく事專也、智慧をとき天下の利非を辨へ、物毎の善惡を知り、萬の藝能、其道くをわたり、世間の人に少しもたまされざる様にして、後、兵法の智慧となる心也、兵法の智慧に於て、とりわきちがふ事有もの也、戦の場萬事せはき時なれ共、兵法の道理をきはめ、うごきなき心能々吟味すべし。

一 兵法の身なりの事 身のかゝり、顔はうつむがずあをのかずかたむかずひずまず、目をみださずひたいにしはをよせず、まゆあいにしわをよせて、目の玉のうごかざる様にして、また、させぬ様に思ひて、目を少しすくめる様にして、う

らやかに見ゆるかを鼻すち直にして、少しおとがひを出す心也、首はうしろのすじを直にうなじに力を入れて、肩より總身はひとしく覺へ、兩の肩をさげ、脊すちをろくに尻を出さず、ひざより足先まで、力を入れて腰のかゞまざる様に、腹をはりくさびをしむると云ひて、脇差のさやに腹をもたせて、帯のくつろがざる様に、くさびをしむると云教有り、總て兵法の身に於て、常の身を兵法の身とし、兵法の身を常の身とする事肝要なり、能々吟味すべし。

一 兵法の目付と云事 目の付様は大きに廣く付る目也、觀見二ツの事、觀の目つよく見の目よはく、遠き所を近く見、近き所を遠く見る事、兵法の專也、敵の太刀を知り、聊敵の太刀を見ずと云事、兵法の大事也、工夫有べし、此目付ちいさき兵



法にも大きなる兵法にも同じ事也、目の玉動かずして、兩脇を見る事肝要也、箇様の事いそがしき時、俄には辨へがたし、此書付を覚え、常住此目付になりて、何事にも目付の替らざる所、能々吟味有べきもの也、

一 太刀の持様の事 太刀の取様は、大指人さしを浮べる心に持たけ高指しめずゆるまずくすし指小指をしむる心にして持也、手の内にはくつろぎの有事悪し、敵をきるものなりと思ひて、太刀を取るべし、敵をきる時も、手の内に替りなく、手のすくまざる様に持べし、もし敵の太刀をはる事うくる事あたる事おさゆる事有り共、大指人さし指斗を少替る心にして、兎にも角にもきると思ひて太刀を取るべし、ためしものなどきる時の手の内も、兵法にしてきる時の手の内

も人をきると云手の内に替る事なし、總て太刀にても手にも、いつくと云事を嫌ふ、いつくはしぬる手也、いつかざるは生る手也、能々心得べきもの也、

一 足つかひの事 足の運び様の事、つま先を少うけて、きびすを強く踏べし、足遣ひはことによりて、大小遅速は有共、常にあゆむが如し、足に飛足浮足ふみすゆる足とて、是三ツ嫌ふ足也、此道の大事にいはいはく、陰陽の足と云是肝心也、陰陽の足とは、片足斗動かさぬもの也、きる時ひく時うくる時迄も、陰陽とて右左々々踏む足也、返すく、片足踏事有べからず、能々吟味すべきもの也、

一 五方の構の事 五方の構は上段中段下段、右のわきに構ゆる事、左のわきに構ゆる事、是五法也、構五ツに分つと云へ



共、皆人をきらん爲也、構五ツより外はなし、何れの構なり共、かまゆるは思はずきる事也と思ふべし、構の大小はことにより利にしたがふべし、上中下は體の構也、兩脇はゆふの構也、右左の構うへのつまりてわき一方つまりたる所などにての構也、右左は所によりて分別有、此道の大事に曰く、構のきわまりは中段と心得べし、中段構の本意也、兵法大きにしてい見よ、中段は大將の坐也、大將につきあと四段の構也、能々吟味すべし、

一 太刀の道と云事 太刀の道を知ると云事は、常に我さす刀をゆび二ツにて振る時も道すじ能知りては、自由に振るの也、太刀をはやく振らんとするによつて、太刀の道ちがひて振がたし、太刀は振りよき程に靜に振る也、或は扇或は小

刀など遣ふ様に、はやく振らんと思ふによつて、太刀の道ちがひて振がたし、夫は小刀きざみといひて、太刀にては人のきれざるもの也、太刀を打さげてはあげよき道にあげ、横に振りては横にもどり、よき道へもどし、いかにも大きにひちをのべて強く振る事、是太刀の道也、我兵法の五ツの表を遣ひ覺ゆれば、太刀の道定まりて振よき所也、能々鍛煉すべし、一五ツのおもての次第第一の事 第一の構中段太刀先を敵の顔へ付て、敵に行相時、敵太刀打かくる時、右へ太刀をはづして乗り、又敵打かくる時、きつさきかへしにて打、うち落したる太刀其儘置、又敵の打かくる時、下より敵の手はる是第一也、總別此五ツの表書付る斗にては、合點なりがたし、五ツの表のぶんは、手にとつて太刀の道稽古する所也、此五ツ



の太刀筋にて我太刀の道をも知り、如何様にも敵の打太刀知る、所也、是二刀の太刀の構五ツより外に有らずと知らする所也、鍛煉すべきなり、  
 一 おもての第二の次第の事 第二の太刀上段に構へ、敵打かくる所、一度に敵を打也、敵を打はつしたる太刀、其儘置き、又敵の打所を下よりすくひ上て打つ、今一ツ打も同じ事也、此表の内に於ては、様々の心持色々の拍子、此表のうちを以て、一流の鍛煉をすれば、五ツの太刀の道こまやかに知つて如何様にも勝所有稽古すべき也、  
 一 おもて第三の次第の事 第三の構下段に持ひつさげたる心にして、敵の打かくる所を、下より手をはる也、手をはる所を亦敵はる太刀を打落さんとする所をこす拍子にて敵

打たるあと二のうでを横にきる心也、下段にて敵の打所を一度に打留る事也、下段の構道をはこぶにはやき時も遅き時も出合もの也、太刀を取て鍛煉有るべき也、  
 一 おもて第四の次第の事 第四の構左の脇に横に構へて敵の打かくる手を下よりはるべし、下よりはるを敵打落さんとするを、手をはる心にて、其儘太刀の道をうけ我肩の上へすちかひにきるべし、是太刀の道也、又敵の打かくる時も、太刀の道をうけて勝道也、能々吟味有べし、  
 一 おもて第五の次第の事 第五の次第太刀の構、我右の脇に横に構へて、敵打かくる所のくらゐをうけ、我太刀の下横よりすちかへて、上段に振あげ、上より直にきるべし、是も太刀の道能知らん爲也、此おもてにてふりつけぬれば、おも



一七六  
 き太刀自由にふらるゝ所也、此五ツのおもてに於て、こまかに書付る事に非ず、我家の一通太刀の道を知り、亦大形拍子をも覚え、敵の太刀を見分る事、先づ此五ツにて不斷手をからす所也、敵と戦ひの内にも、此太刀すちをからして敵の心を受け、色々の拍子にて、如何様にも勝所也、能々分別すべし、一有構無構の教の事 有構無構と云ふは、太刀を構ふると云事有べき事に非ず、され共五方に置事あれば、構へ共成べし、太刀は敵の縁により所により、けいきにしたがひ、何れの方に置たり共、其敵きりよき様に持心なり、上段も時に隨ひ少さかる心なれば、中段となり、中段を利により少あくれば上段となる、下段も、おりにふれ、少あくれば中段となる、兩脇の構もくらゐにより少し中へ出さば、中段下段共なる心な

一七九  
 り、然るに依て構は有りて、構は無きと云ふ理也、先太刀を執ては何れにしてなり共、敵を切ると云心也、若敵の切る太刀を受るはるあたるねばるさわるなど云ふ事あれ共、皆皆敵を切る縁也と心得べし、受ると思ひはると思ひあたると思ひねばると思ひさわると思ふに依て、切る事不足なるべし、何事も切る縁と思ふ事肝要也、能々吟味すべし、兵法大きにして、人數たてと云ふも構也、皆合戦に勝儀也、いつくと云ふ事悪し、能々工夫すべし、  
 一敵を打に一拍子の打の事 敵を打つ拍子に一拍子と云ひて、敵我あたるほどの位を得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、其身も動かさず心も付ず、如何にも早く直ぐに打拍子也、敵の太刀ひかんはずさん打たんと思ふ心のなき内を



打拍子は一拍子也、此拍子能習得て、間の拍子を早く打事鍛錬すべし、

一二のこしの拍子の事 二のこしの拍子我打たんとする時、敵はやく引早くはりのくる様なる時は、我打と見せて、敵のはりてたるむ所を打、ひきてたるむ所を打、是二のこしの打也、此書付斗にては、中々打得がたかるべし、教受ては忽合點のゆく所也、

## 藏 武 本 宮

一無念無想の打と云事 敵も打たさんとし、我も打たさんと思ふ時、身も打身になり、心も打心になつて、手はいつとなく空より後はやにつよく打事、は無念無想とて、一大事の打也、此打度々出合打也、能く習ひ得て鍛煉有べき義也、  
一流水の打と云事 流水の打と云て、敵相になりてせり合

ふ時、敵早くひかん早くはづさん早く太刀をはりのけんとする時、我身も心も大きになつて、太刀を我身のあとより、いかほともゆるく、とよとみのある様に、大きにつよく打事有、此打習ひ得ては、髓に打よきもの也、敵の位を見分る事肝要也、

一縁のあたりと云事 我打出す時、敵打とめんはりのけんとする時、我打一ツにして、あたまをも打足をも、打太刀の道一ツを以て、何れなり共打所、是縁の打也、此打よく、打習ひ、何時も出合打也、細々打合ひて、分別有べき事也、  
一石火のあたりと云事 石火のあたりは、敵の太刀と我太刀と付合ほどにて、我太刀少もあけずして、いかにもつよく打也、是は足もつよく身もつよく手もつよく、三所を以て早



く打べき也、此打度々打習はずしては打がたし、よく鍛錬すれば強くあたるもの也、

一紅葉の打と云事、紅葉の打、敵の太刀を打落し太刀取なをす心也、敵前に太刀を構へ打んはらんうけんと思ふ時、我打心は無念無想の打、又石火の打にても、敵の太刀を強く打其儘あとをねはる心にて、きつききさがりにうてば、敵の太刀必ず落るもの也、此打鍛練すれば打落す事やすし、能々稽古有るべし、

一太刀にかはる身と云事、身にかはる太刀共いふべし、惣て敵を打身に、太刀も身も一度には打ざるもの也、敵の打縁により、身をばさききへうつ身になり、太刀は身にかまはず打所也、若は身はゆるがず、太刀にて打事は有れ共、大形は身を

先へ打、太刀をあとより打ものなり、能々吟味して打習ふべき也、

一打とあたると云事、打と云ふ事あたると云事二ツ也、打と云ふ心は何れの打にも思ひうけて慥に打也、あたるは行あたる程の心にて、何と強うあたり、忽ち敵の死る程にても、是はあたる也、打と云ふは心得て打と云所也、吟味すべし、敵の手にても足にてもあたると云ふは、先あたる也、あたりて後を強く打たん爲也、あたるはさはる程の心、能習得ては各別の事也、工夫すべし、

一あうここの身と云事、秋猴の身とは、手を出さぬ心也、敵へ入身に少しも手を出す心なく、敵打前身をはやく入心也、手を出さんと思へば、必ず身の遠のくものなるに依て、惣身



をはやくうつり入心也、手にて受合する程の間には、身も入  
やすきもの也、能々吟味すべし、  
一志つこうの身と云事 漆膠とは入身に能付てはなれぬ  
心也、敵の身に入時、頭をもつけ身をもつけ足をもつけ強く  
付所也、人毎に顔足は早く入れども、身ののくもの也、敵の身  
へ我身をよく付け、少しも身のおひのなき様につくもの也、  
能々吟味有るべし、  
一たけくらべと云事 たけくらべと云は、何れにても敵へ  
入込時は、我身のちまざる様にして、足をも延べ腰をも  
べ首をも延べて強く入、敵の顔と顔とをならべ、身のたけを  
くらぶるに、くらべ勝と思ふ程高くなつて、強く入所肝心也、  
能々工夫すべし、

一ねばりをかくと云ふ事 敵も打かけ我も太刀打かく  
るに、敵うくる時、我太刀敵の太刀に付てねばる心にして入  
也、ねばるは太刀なれがたき心餘り強くなき心に入るべし、  
敵の太刀につけてねばりをかけ入時は、いか程も靜に入て  
も苦しからず、ねばると云事ともつるゝと云事、ねばるは強  
くもつるゝはよわし、此事分別有べし、  
一身のあたりと云事 身のあたりは、敵のきわへ入込て、身  
にて敵にあたる心也、少し我顔をそばめ、我左の肩を出し、敵  
の胸にあたる事、我身をいか程も強くなりあたる事いきあ  
い拍子にてはづむ心に入べし、此入る事入習得ては、敵二間  
も三間もはねのく程強きもの也、敵死入ほどもあたる也、能  
々鍛錬有べし、



一三ツのうけの事 三ツのうけと云は、敵へ入込時、敵打出す、太刀をうくるに、我太刀にて敵の目をつく様にして、敵の太刀を、我右の肩へ引ながして受るべし、亦つきうけと云ひて、敵打太刀を敵の右の目をつく様にして、くびをはさむ心につきかけて受る所、又敵の打時短き太刀にて入に、受る太刀はさのみかまはず、我左の手にて敵のつらをつく様にして入込む、是三ツのうけ也、左の手をにぎりてこぶしにて、つらをつく様に思ふべし、能々鍛錬有べきもの也。

一面てをさすと云事 面をさすとは、敵太刀相になりて、敵の太刀の間、我太刀の間に、敵の顔を我太刀さきにて突く心に、常に思ふ所肝心也、敵の顔を突く心有れば、敵の顔身ものるもの也、敵をのらす様にしては、色々勝つ所の利有、能々

工夫すべし、戦の内に敵の身のる心有てははや勝所也、夫によつて面をさすと云事忘るべからず、兵法稽古の内に、此利鍛錬有べきもの也。

一心をさすと云事 心をさすと云は戦の内にうへつまりわきつまりたる所などにてきる事、何れもなりがたき時、敵をつく事、敵の打太刀をはづす心は、我太刀のむねを、直に敵に見せて、太刀を刀先ゆがまざる様に引とりて、敵のむねを突く事也、若我くたびれたる時か、又は刀のきれざる時など、此儀専ら用ゐる心也、能々分別すべし。

一かつとつと云事 喝咄と云は、何れも、我打かけ敵をおつこむ時、敵また打かへす様なる所、下より敵を突く様にあけて返しにて打事、何れも早き拍子を以て、喝咄と打喝と突あ



げ、咄と打心也。此拍子何時も打合の内には、専ら出合事なり、喝咄のしやうきつきあぐる心にして、敵を突と思ひあぐると、一度に打拍子能く稽古して吟味有るべき事也。

一はりうけと云事　はりうけと云は、敵と打合時とたんとたんと云ふ拍子になるに、敵の打所を我太刀にてはり合せ打也。はり合する心はさのみきつくはるには非ず、亦うくるに非ず、敵の打太刀に應じて、打太刀をはりて、はるより早く敵を打事也。はるにて、先をとり、うつにて先をとる所肝要也。はる拍子能合へば、敵何と強く打ても少しはる心有れば、太刀先の落る事に非ず、能習得て吟味有べし。

一多敵の位の事　多敵の位と云ふは、一身にして大勢と戦ふ時の事也。我刀脇差をぬきて、左右へひろく太刀を横にす

て、構る也。敵は四方よりかゝる共、一方へおひまはす心也。敵かゝる位前後を見分て先へ進む者に早くゆき合ひ、大きに目を付て、敵打出すくらゐを得て、右の太刀も左の太刀も、一度にふりちがへて待事悪し、早く兩脇の位に構へ、敵の出たる所を強く切込み、おつくつして、其儘又敵の出たる方へかゝりふりくつす心也。いかにもして敵をひとへにうをつなきにおいなす心に志かけて、敵のかさなると見えば、其儘間をすかさず、強くはらひこむべし。敵あいこむ所ひたと追まはしぬれば、はかのゆきがたし、又敵の出るかた／＼と思へは待心有りて、はかゆきがたし、敵の拍子をうけてくづる所を知り勝事也。折々相手を餘り多くよせ追込付て、其心を得れば、一人の敵も二十の敵も心やすき事也。能稽古し



て吟味有るべき也、

一打あいの利の事 此の打あいの利と云事にて、兵法太刀にての勝利を辨ふる所也、こまかに書しるすに非ず、能稽古有りて、勝所を知るべきもの也、大形兵法の實の道をあらはす太刀也、口傳

一一ツの打と云事 此一ツの打と云心をもつて、髓に勝所を得る事也、兵法能學ばざれば心得がたし、此儀能鍛煉すれば、兵法心の儘になつて思ふ儘に勝道也能々稽古すべし、一直通の位と云事 直通の心二刀一流の實の道をうけて傳ふる所也、能々鍛鍊して此兵法に身を爲す事肝要なり、口傳 右書付る所一流の劔術、大形此卷に記し置事也、兵法太刀を取て、人に勝事を覺ゆるは、先五ツの表を以て、五方の構を知

り、太刀の道を覺えて惣體自由まろになり、心のきゝ出て、道の拍子を知り、おのれと太刀も手さへて、身も足も心の儘にはとけたる時に隨ひ、一人に勝ち二人に勝ち、兵法の善惡を知る程になり、此一書の内を一ヶ條くゝと稽古して敵と戦ひ、次第くゝと道の利を得て、不斷心に罹いそぐ心なくして、折々手に觸れては徳を覺え、何れの人共打合、其心を知つて、千里の敵も一足づゝ運ぶなり、緩々と思ひ、此法を行ふ事、武士の役也と心得て、今日は昨日の我に勝ち、あすは下手に勝ち、後は上手に勝ち思ひ、此書物の如くにして、少しも脇の道へ心のゆがさる様に思ふべし、縦ひ何程の敵に打勝ても、習ひに背く事に於ては、實の道に有べからず、此利心にうかひては、一身を以て數十人にも勝心の辨へ有べし、然る上は劔術の



智力にて、大分一分の兵法をも得道すべし、千日の稽古を鍛とし萬日の稽古を鍊とす、能々吟味有べきもの也、

正保二年五月十三日

新免武藏

寺尾孫之丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延花押

山本源助殿

火の巻

二刀一流の兵法、戦の事を火に思ひとつて戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顯す也、先世間の人毎に兵法の利をちひさく思ひなして、或は指先にて手くひ五寸三寸の利を知り、或は扇を取て、ひちより先の先、後の勝を辨へ、又はしないなどにて、わつかのはやき利を覺え、手をきかせ習ひ足をき

かせ習ひ、少の利の早き所を專とする事也、我兵法に於て、數度の勝負に一命をかけて打合、生死二ツの利をわけ、刀の道をおほえ、敵の打太刀の強弱を知り、刀のはむねの、道を辨へ、敵を打果所の鍛煉を得るに、ちひさき事弱き事思ひよらざる所也、殊に六具かためてなどの利にちひさき事思ひ出る事に非ず、更ば命をはかりの打合に於て、一人して五人十人共戦ひ、其勝道を慥に知る事、我道の兵法也、然るによつて一人して十人に勝ち、千人を以て萬人に勝つ道理、何の差別有んや、能々吟味有べし、去ながら常々の稽古の時、千人萬人を集め、此道し習ふ事成事に非ず、獨太刀を取ても、其敵々の智略をはかり、敵の強弱手たてを知り、兵法の智徳を以て、萬人に勝所を極め、此道の達者となり、我兵法の直道世界に於て、



誰か得ん、又何れか極めんと慥に思ひ取つて、朝鍛夕鍊して磨きおほせて後、獨自由を得、自ら奇特を得、通力不思議有所、是兵として法をおこのふ息也、

一場の次第と云事 場の位を見分る所、場に於て日をおふと云事有、日をうしろになして構ふる也、若所により日をうしろにする事ならざる時は、右のわきへ日をなす様にすべし、座敷にてもあかりをうしろ右脇となす事同前也、うしろの場つまらざる様に左の場をくつろけ、右の脇の場を詰めて構度事也、夜るにても敵の見ゆる所にては火をうしろにおひ、あかりを右脇にする事同前と心得て構ふべきもの也、敵を見おろすと云て、少しも高き所に構ふる様に心得べし、座敷にては、上座を高き所と思ふべし、扱戦になりて敵を追

廻す事、我左の方へ追廻す心難所を敵のうしろにさせ、何れにても難所へ追懸る事肝要也、難所は敵に場を見せずと云ひて、敵に顔をふらせず、油断なくせめ詰る心也、座敷にても敷居鴨居戸障子椽など、又柱などの方へ追詰るにも場を見せずと云事同前也、何れも敵を追懸る方足場のわるき所、又は脇にかまひの有所、何れも場の徳を用ひて、場の勝を得ると云ふ心專にして、能々吟味し鍛鍊有るべきもの也、

一三ツの先と云事 三ツの先一ツは我方より敵へかゝるせんけんの先と云ふ也、又一ツは敵より我方へかゝる時の先、是はたいの先と云也、又一ツは我もかゝり敵もかゝりあふ時の先、體々の先と云是三ツの先也、何れの戦ひ始にも、此三ツの先より外はなし、先の次第を以て勝事を得るものな



れば、先と云事兵法の第一也、此先の子細様々は有りと云へ共、其時の利を先とし、敵の心を見我兵法の智恵を以て、勝事なれば、こまやかに書分る事に非ず、第一懸の先、我がらんと思ふ時、静かにして居、俄かにはやくかゝる先うへを強くはやくして底を残す心の先、又我心をいかにも強くして、足は常の足に少はやく敵のわきへよると、早くもみたつる先、又心をはなつて、初中後同じ事に敵をひしく心にて、底まで強き心に勝、は何れも懸の先也、第二待の先、敵我方へかゝりくる時、少しもかまはずよわき様に見せて、敵近くなつてづんとつよくはなれて飛付様に見せて、敵のたるみを見て、直に強く勝事、是一ツの先、又敵かゝりくる時、我も猶強くなつて出る時、敵のかゝる拍子のかはる間をうけ、其儘勝を得る

事、是待の先の理也、第三體々の先、敵はやくかゝるには、我靜に強くかゝり、敵近くなつて、つんと思ひける身にして、敵のゆとりの見ゆる時、直に強く勝、又敵靜かにかゝる時、我身うきやかに少はやくかゝりて、敵近くなりて、ひともしもみ、敵の色に隨て強く勝事、是體々の先也、此儀濃に云分がたし、此書付を以て、大形工夫有べし、此三ツの先、時に隨ひ理に隨ひ、いつにても、我方よりかゝる事には非るものなれ共、同じくは我方よりかゝりて、敵をまはしたき事也、何れも先の事、兵法の智力を以て、必ず勝事を得る心能々鍛鍊有べし、一枕をおさふると云事、枕をおさふるとは、かしらをあけさせずと云ふ心也、兵法勝負の道に限つて、人に我身をまはされて、あとにつく事悪し、いかにもして敵を自由にまはし



度事也、然るによつて、敵も左様に思ひ我も其心あれ共、人の  
 する事をうけがはすしては叶がたく、兵法に敵の打所をと  
 め、つく所をおさへ、くむ所をもきはなしなどする事也、枕を  
 おさふると云ふは、我實の道を得て、敵にかゝりあふ時、敵何  
 事にも思ふきざしを敵のせぬ内に見知りて、敵の打と云  
 うつのうの字のかしらをおさへて後をさせざる心、枕をお  
 さふる心也、たとへば敵のかゝると云かの字をおさへ、とぶ  
 と云との字のかしらをおさへ、きると云きの字のかしらを  
 おさふる、皆以て同じ心也、敵我にわざをなす事につけて、役  
 にたゞざる事を、敵にまかせ役にたつ事をばおさへて、敵に  
 させぬ様にする所、兵法の專也、是も敵のする事をおさへん  
 く、とする心後手也、先我は何事にても、道にまかせてわざ

をなす内に、敵もわざをせんと思ふかしらをおさへて、何事  
 も役に立せず、敵をこなす所、是兵法の達者、鍛煉の故也、枕を  
 おさふる事、能々吟味有べきなり、  
 一とをこすと云事 渡を越すと云は、たとへば、海を渡るに、  
 瀬戸と云所も有、又は四十里五十里とも長き海を越所を渡  
 と云也、人間の世を渡るにも、一代の内にはとをこすと云所  
 多かるべし、船路にして其との所を知り、船の位を知り、日な  
 みを知りて、友船は出さず共、其時の位をうけ或はひらきの  
 風にたより、或は追風をも受、若し風替りても、二里三里はろ  
 かちをもつても港に着を心得て船を乗とり渡を越所也、其  
 心を得て人の世を渡るにも、一大事にかけて渡を越と思ふ  
 心有べし、兵法戦のうちにも、とをこす事肝要也、敵の位を受



我身の達者を覚え、其理を以てとをこす事、よき船頭の海路を越と同じ、渡を越ては亦心安き所也、とをこすと云事、敵によわみをつけ、我身も先になりて、大形はや勝所也、大小の兵法の上にも、とをこすと云心肝要也、能々吟味有べし、一けいきを知ると云事、景氣を見ると云は、大分の兵法にして、敵の榮え衰へを知り、相手の人数の心を知り、其場の位を受け、敵の景氣を能見受け、我人数何としかけ、此兵法の理にて、髓に勝と云所をのみこみて、先の位を知て戦所也、又一分の兵法も、敵のなかれを辨へ、相手の人柄を見かけ、人の強き弱き所を見付け、敵の氣色にちがふ事をしかけ、敵のめりかりを知り、其間の拍子を能知りて、先をしかくる所肝要也、物事の景氣と云事は、我智力強ければ、必見ゆる所也、兵法自

由の身に成ては、敵の心を能計て勝道多かるべき事也、工夫有べし、

一けんをふむと云事、劔をふむと云心は、兵法に専ら用る儀也、先大きなる兵法にしては、弓鐵砲に於ても、敵我方へ打かけ、何事にてもしかくる時、敵の弓鐵砲にてもはなしかけて、其あとにかゝるによつて、又弓をつかひ又鐵砲に薬をこみてかゝりこむ時、こみ入かたし、弓鐵砲にても敵のはなつ内にはやくかゝる心也、早くかゝれば矢もつかひがたし、鐵砲も打得ざる心也、物毎を敵のしくると、其儘其理を受て、敵のする事を踏付て勝心也、又一の兵法も、敵の打出す太刀のあとへ打ては、とたんくとなりて、はかゆかざる所也、敵の打出す太刀は、足にてふみ付る心にして、打出す所をかち、二



度目を敵の打得ざる様にすべし、踏と云は、足には限るべからず、身にてもふみ、心にてもふみ、勿論太刀にてもふみ付て、二の目を敵に能させざる様に心得べし、是則物毎の先の心也、敵と一度にといひてゆきあたる心にてはなし、其儘あとに付心也、能々吟味有べし、  
 一くづれを知ると云事 崩と云事は物事ある物也、其家のくづる、身のくづる、敵のくづる、事も、時のあたりて拍子ちがひになりてくづる、所也、大分の兵法にしても、敵のくづる、拍子を得て、其間をぬかさぬ様に追たつる事肝要也、崩る、所のいきをぬかしては、たてかへす所有べし、又一分の兵法にも戦内に敵の拍子ちがひてくづれ目の付もの也、其ほどを油断すれば、又たちかへり新敷なりて、はかゆか

ざる所也、其くづれめに付、敵のかほたてなをさざる様に慥に追かくる所肝要也、追かくるは直に強き心也、敵たてかへさざる様に打はなすもの也、打はなすと云事、能々分別有べし、はなれざればしたるき心有、工夫すべきもの也、  
 一敵になると云事 敵になると云は、我身を敵になり替て思ふべきと云所也、世の中を見るに、ぬすみなどして家の内へ取籠る様なるものをも、敵を強く思なすもの也、敵になりて思へば、世の中の人を皆相手とし、にけこみてせんかたなき心也、取籠るものは雉子也、打果しに入る人は鷹也、能々工夫有べし、大きなる兵法にしても、敵といへば強く思ひて、大事にかくるもの也、よき人数をもち、兵法の道理を能知り、敵に勝と云所を能うけては、氣遣すべき道に非ず、一分の兵法



も敵になりて思ふべし、兵法能心得て道理強く其道達者なるものに於ては、必ずまくなると思ふ所也、能々吟味すべし、一四手をはなすと云事、四手をはなすとは、敵も我も同じ心にはりやう心になつては、戦のはかゆかざるもの也、はりやう心になると思はゞ其儘心をすて、別の利にて、勝事を知る也、大分の兵法にしても、四手の心になれば、果敢ゆかずひとの先する事也、はやく心をすて、敵の思はざる利にて勝事專也、亦一分の兵法にても、四手になると思はゞ其儘心をかへて敵の位を得て各別替りたる利を以て勝を辨ふる事肝要也、能々分別すべし、

一かけをうごかすと云事、陰を動かすと云は、敵の心の見えわかぬ時の事也、大分の兵法にしても、何共敵の位の見わ

けざる時は、我かたより強くしかくる様に見せて、敵の手たてを見る者也、手だてを見ては、各別の利にて勝事やすき所也、又一分の兵法にしても、敵うしろに太刀を構へ、脇に構へたる様なる時は、ふつと打んとすれば、敵思ふ心を太刀に顯す者也、顯れ知るゝに於ては、其儘利をうけて、慥に勝を知るべきもの也、油斷すれば拍子はぬくる者也、能々吟味有べし、一かけをおさふると云事、影をおさふると云は、敵のかたよりしかくる心の見えたる時の事也、大分の兵法にしては、敵のわざをせんとする所をおさふると云ひて、我方より其利をおさふる所を、敵に強く見すれば、強きにおされて、敵の心替る事也、我も心をちがへて、空なる心より、先をしかけて勝所也、一分の兵法にしても、敵のおこる強き氣ざしを、利の



拍子を以てやめさせ、やみたる拍子に我勝利をうけて、先をしかくるもの也、能々工夫有べし、

一うつらかすと云事 移らかすと云は、物毎に有もの也、或はねむりなども移り、或はあくびなどのうつるもの也、時のうつるも有、大分の兵法にして、敵うはきにしてことをいそぐ心の見ゆる時は、少しも夫にかまはざる様にして、いかにもゆるりとなりて見すれば、敵も我事に受てきざしたるむ物なり、其うつりたると思ふ時、我方より空の心にして、はやく強くしかけて、勝利を得るもの也、一分の兵法にしても、我身も心もゆるりとして、敵のたるみの間をうけて、強く早く先にしかけて勝所專也、亦よわすると云て、是に似たる事有、一ツはたいくつの心、一ツはうかつく心、一ツはよわくなる

心能々工夫有べし、

一むかつかすると云事 むかつかすると云は、物毎に有、一ツにはきはるとき心、二ツにはむりなる心、三ツには思はざる心、能吟味有べし、大分の兵法にして、むかつかする事肝要也、敵の思はざる所へ、いきとふしくしかけて、敵の心のきはまらざる内に、我利を以て先をしかけて勝事肝要也、又一分の兵法にしても、はじめゆるりと見せて、俄に強くかゝり、敵の心のめりかり働くにしがひ、いきをぬかさず、其儘利をうけて勝を辨ふる事肝要なり、能々吟味有べき也、

一おびやかすと云事 おびゆると云事、物毎に有事也、思ひよらぬ事におびゆる心也、大分の兵法にしても、敵をおびやかす事、眼前の事に非ず、或は物の聲にてもおびやかし、或は



小を大にしておびやかす、又かたわきより不斗おびやかす事、是はおびゆる所也、其おびゆる拍子を得て、其利を以て勝べし、一分の兵法にしても、身を以ておびやかす、太刀を以ておびやかす、聲を以ておびやかす、敵の心になき事をしかけておびゆる所の利を受て、其儘勝を得る事肝要也、能々吟味有べし、

一まふる、と云事、まふる、と云は、敵我手近くなつて、互に強くはりあひて、果敢ゆかざると見れば、其儘敵と一ツにまふれあひて、まふれあひたる其内に、利を以て勝事肝要也、大分小分の兵法にも、敵我方わけては、互に心はりあひて勝のつかざる時は、其儘敵にまふれて、互にわけなくなる様に心て、其内の徳を得、其内の勝を知りて、強く勝事專也、能々吟

味有べし、

一かどにさはると云事、角にさはると云は、物事強き物をおすに、其儘直におしこみがたきもの也、大分の兵法にしても、敵の人数を見ては、り出強き所の角にあたりて、其利を得べし、角のめるに随ひ、惣もみなめる心有、其なめる内にもかとかどに心得て、勝利を受る事肝要也、一分の兵法にしても、敵の體のかどにいたみをつけ、其體少しもよわくなりくづる體になりては、勝事やすきもの也、此事能々吟味して、勝所を辨ふる事專也、

一うろめかすと云事、うろめかすと云は、敵に慥なる心をもたせざるやうにする所也、大分の兵法にしても、戦の場に於て敵の心を計り、我兵法の智力を以て、敵の心をそここ、



となし、とのかうのと思はせ、おそしはやしと思はせ、敵うろめく心になる拍子を得て、慥に勝所を辨ふる事也、又一分の兵法にして、我時にあたりて色々のわざをしかけ、或は打と見せ、或はつくと思せ、又は入込と思はせ、敵のうろめく氣さしを得て、自由に勝所、是戰の專也、能々吟味有べし、

一三ツの聲と云事 三ツの聲とは、初中後の聲と云て、三ツにかけ分る事也、所により聲をかかると云事專也、聲はいきほひなるによつて、火事などにもかけ、風波にもかけ、聲は勢力を見するもの也、大分の兵法にしても、戰より初めにかくる聲は、いか程もかさをかけて聲をかけ、又戰ふ間の聲は、調子をひきて、底より出る聲にてかゝり、勝て後あとに大きに強くかくる、是三ツの聲也、又一分の兵法にしても、敵をうご

かさん爲打と見せて、頭よりゑいと聲をかけ、聲の跡より太刀を打出すもの也、亦敵を打て、跡に聲をかかふる事、勝を知らする聲也、是を先後の聲と云、太刀と一度に大きに聲をかかふる事なし、若戰の内にかくるは、拍子にのる聲、ひきてかくるなり、能々吟味有べし、

一まぎるゝと云事 まぎるゝと云は、大分の戰にしては、人數を互にたて、合敵の強き時、まぎるゝと云て、敵の一方へかかり、敵くづるゝを見ばすて、又強き方へかゝる、大形つゞらわりにかゝる心也、一分の兵法にして、敵を大勢よするも此心專也、方々をかたす方々には又強き方へかゝり、敵の拍子を得てよき拍子に左右とつゞらわりをりの心におもひて、敵の色を見合てかゝるもの也、其敵の位を得、打とほるに於



ては、少も引心なく、強くかつ利也、一分入身の時も、敵の強きには其心ありまぎるゝと云事、一足も引事をしらず、まぎれゆくと云心、能々分別すべし、  
 一ひしぐと云事、ひしぐと云は、縦ば敵をよわく見なして、我つまめになつて、ひしぐと云ふ心專也、大分の兵法にして、も、敵に人数のくらゐを見こなし、又は大勢なり共、敵うろめきてよわみつく所なれば、ひしぐと云てかしらよりかさをかけておつひしぐ心なり、ひしぐ事よわければもてかへす事有、手の内にぎつてひしぐ心能々分別すべし、又一分の兵法の時も、我手にふそくのもの、又は敵の拍子ちがひすさりめになる時、少しもいきをくれず、目を見合ざる様になし、眞直にひしぎつくる事肝要也、少しもおきたてさせぬ所第

也、能々吟味有べし、

一さんかいのかわりと云事、山海の心と云は、敵我戦の内に同じ事を度々する事悪き所也、同じ事二度は是非に及ばず、三度するに非ず、敵にわざをしかくるに、一度にて用ひずば、今一ツもせきかけて、其利におよばず各別替りたる事をほつとしかけ、それにもはかゆすば、又各別の事をしかくべし、然るによつて、敵山と思はゞ海としかけ、海と思はゞ山としかくる心、兵法の道なり、能々吟味有べき事也、  
 一そこをぬくと云事、底を抜と云は、敵と戦ふに、其道の利を以て上は勝と見ゆれ共、心をたへさゞるによつて、上にてはまけ下の心はまけぬ事有、其儀に於ては、我俄に替りたる心になつて、敵の心をたやし、底よりまくる、心に敵のなる所



見る事專也、此底を抜く事、太刀にても拔、又身にてもぬき、心  
にてもぬく所有、一道には辨ふべからず、底より崩れたるは  
我心残すに及ばず、さなき時は残す心也、残す心あれば、敵く  
づれがたき事也、大分小分の兵法にしても、底をぬく所、能々  
鍛錬有べし、

## 宮 本 武 藏

一あらたになると云事 新たになるとは、敵我戦ふ時、もつ  
る、心になつて、はかゆかざる時、我氣を振捨て、物毎をあた  
らしくはじむる心に思ひて、其拍子を受けて勝を辨ふる所な  
り、新になる事は、何時も敵と我きしむ心になると思はゞ、其  
儘心を替て、各別の利を以て勝べき也、大分の兵法に於ても、  
新たになると云所、辨ふる事肝要也、兵法の智力にては、忽ち  
見ゆる所也、能々吟味有べし、

## 第 九 章 五 輪 書 の 卷

一そとうごしゆと云事 鼠頭午首と云ふは、敵と戦のうち  
に、互にこまかなる所を思ひ合てもつる、心になる時、兵法  
の道を、常に鼠頭午首と云ふと思ひて、いかにもこまかなる内  
に、俄に大きな心にして、大小にかはる事、兵法一ツの心だ  
て也、平生人の心も鼠頭午首と思ふべき所、武士の肝心也、兵  
法大分小分にしても、此心をはなるべからず、此事能々吟味  
有るべきもの也、

一しやうそつをしると云事 將卒を知るとは、いつれも戦  
に及ぶ時、わが思ふ道に至ては、たえず此法を行ひ、兵法の智  
力を得て、我敵たるものをば、皆我卒なりと思ひとつて、なし  
たき様になすべしと心得、敵を自由にまはさんと思ふ所、我  
は將也、敵は卒也、工夫有べし、



二一六  
 一つかをはなすと云事 束をはなすと云に色々心有事也、  
 無刀にて勝心有、又太刀にてかたざる心有、さまざま心のゆ  
 く所、書付るに非ず、能々鍛錬すべし  
 一いはをの身と云事 岩尾の身と云事、兵法を得道して、忽  
 ち岩尾の如くに成て、萬事あたざる所、うごかざる所、口傳  
 右書付る所、一流劍術の場にして、たえず思ひよる事のみ云  
 顯し置もの也、今初て此利を書記物なれば、あとさきと書ま  
 ざる、心有て、こまやかに云わけがたし、乍去此道を學ぶべ  
 き人の爲には心しゆるしに成るべきもの也、我若年より以  
 來兵法の道に心をかけて、劍術一通りの事にも手をからし、  
 身をからし、色々様々の心に成り、他の流々をも尋見るに、或  
 は口にていひかこつけ、或は手にてこまかなるわざをし、人

目によき様に見すると云ても、一ツも實の心に有べからず、  
 勿論かやうの事しならひても、身をきかせならひ、心をきか  
 せつくる事と思へ共、皆是道のやまひとなりて、後々までも  
 うせがたくして、兵法の直道、世にくちて道のすたる基也、劍  
 術實の道になつて、敵と戦ひ勝事、此法聊替事有べからず、我  
 兵法の智力を得て、直なる所を行ふに於ては、勝事うたがひ  
 有べからざるもの也、

正保二年五月十二日

新 免 武 藏

寺尾孫之丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延花押

山本源介殿

風之卷



兵法他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付、風の巻として此巻に顯す所也、他流の道を知らずしては、我一の道體に辨へがたく、他の兵法を尋見るに、大きな太刀をとつて、強き事を専らにして、其わざをなすなかれと有、或は小太刀と云ひて、短き太刀を以て、道を勤るなかれと有、或は太刀かず多くたゝみ、太刀の構を以て、おもてと云ひ、奥として道をつたふる流も有、是皆實の道に非る事、此巻の奥に體に書顯し、善惡理非を知らずする也、我一流の道理各別の儀也、他の流藝にわたつて、身すぎの爲にして色をかざり、花をさかせ、うりものにこしらへたるによつて、實の道に非る事歟、亦世の中の兵法、劔術斗にちひさく見たて、太刀をふり習ひ、身をきかせて、手のかるゝ所を以て、勝事を辨へたるものか、何れも

體なる道に非ず、他流の不足成所、一々此書に書顯す也、能々吟味して、二刀一流の利を辨ふべきもの也、  
一他流に大きな太刀を持事、他に大きな太刀をこのむ流有、我兵法よりして、是をよわき流と見立る也、其故は他の兵法いかさまにも、人に勝と云理を知らずして、太刀の長きを徳として、敵相遠き所より勝度と思ふによつて、長き太刀このむ心有べし、世の中にいふ一寸手まさりとて、兵法知らぬものゝ沙汰也、然るによつて兵法の利なくして、長きを以て遠く勝んとする、それは心のよわき故なるによつて、よわき兵法と見立る也、若敵相近く組合ほどの時は、太刀長き程打事もきかず、太刀のもとをりすくなく、太刀をにゝして、小脇差手振の人におとるもの也、長き太刀好む身にしては、



其云わけは有ものなれ共、夫は其身ひとりの理也、世の中の實の道より見る時は、道理なき事也、長き太刀もたずして、短き太刀にては、必まくべき事歟、或は其場により、うへしたわきなどのつまりたる所、或は脇差斗の坐にても、長きを好む心、兵法のうたがひとてあしき心也、人により小刀なるものも有、其身により長かたなき事ならざる身も有、昔より大は小をかふへると云へば、むさと長きをきらふには非ず、長きとかたよる心を嫌ふ儀也、大分の兵法にして、長太刀は大人數也、短きは小人數也、小人數と大人數にて合戦はなるまじきものか、小人數にて大人數に勝たる例多し、我一流に於て左やうにかたつきせまき心嫌ふ事也、能々吟味有べし、一他流に於てつよみの太刀と云事、太刀につよき太刀、よ

わき太刀と云事は有べからず、つよき心にてふる太刀はあらきもの也、あらしき斗にては勝がたし、又つよき太刀と云て、人をきる時にして、むりにつよきらんとすればきれざる心也、ためしものなどにきる心にも、つよきらんとする事あし、誰に於てもかたきときりやふに、よわきらんとつよきらんと思ふものなし、唯人をきりころさんと思ふ時は、つよき心もあらず、勿論よわき心にもあらず、敵のしぬる程と思ふ儀也、若はつよみの太刀にて、人の太刀つよきはれば、はりあまりて必あしき心也、人の太刀に強くあたれば、我太刀もおれくだくる所也、然るによつて、つよみの太刀など、云事なき事也、大分の兵法にしても、つよき人數を持、合戦に於てつよかたんと思へば、敵もつよき人を持、戦もつよ



せんと思ふ、それはいつれも同じ事也、物毎に勝と云事、道理なくしては勝事あたはず、我道に於ては、少も無理なる事を思はず、兵法の智力を以て如何様にも勝所を得る心也、能々工夫有べし、

一他流に短き太刀を用ふる事、短き太刀斗にて、勝んと思ふ所、實の道に非ず、昔より太刀かたなと云て、長きと短きと云ふ事を顯し置也、世の中に強力なる者は、大なる太刀をもかろく振なれば、むりに短きを好む可にあらず、其故は長きを用て、鎧長太刀をも持物也、短き太刀を以て人の振太刀の透間をきらん、飛いらんつかまんなどと思ふ心かたつきて悪し、又すきまをねらふ所、萬事後手見えもつる、と云心有て嫌事也、若は短かき物にて、敵へ入くまん、とらんとする事、

大敵の中にて役に立ざる心也、短きにてし得たるものは、大勢をもきりはらはん、自由に飛ばんくるはんと思ふ共、皆うけ太刀と云物になりてとりまざる、心有て、慥成道にてはなき事也、同くは我身は強く直にして、人を追廻し人に飛はねさせ、人のうろめく様にしかけて、慥に勝所を專とする道也、大分の兵法に於ても、其理有、同じくは人数かさを以て、敵を矢場に志ほし、即時にせめつぶす心兵法の專也、世の中人の物をしならふ事へいぜいもうけつかはしつぬけつくゞりつしならへば、心道にひかされて、人にまはさる、心有、兵法の道直にたゞしき所なれば、正理を以て人を追廻し、人をしてがふる心肝要也、能く吟味有べし、

一他流に太刀かず多き事、太刀の數餘多にして、人に傳ふ



る事道をうり物にしたて、太刀數多くしりたるを、初心のものに深く思はせん爲成べし、兵法に嫌ふ心也、其故は人をきる事、色々あると思ふ所まよふ心也、世の中に於て人をきる事替る道なし、知る者も知らざる者も、女童子も打たゞききると云道は、多くなき所也、若かわりてはつくそなくそと云外はなし、先きる所の道なれば、數の多かるべき子細にあらず、され共場により道に隨ひ、上わきなどのつまりたる所などいはず、太刀のつかへざるやうに持道なれば、五方とて五ツの數は有べきもの也、夫より外にとりつけて手をねし身をひねりて飛ひらき、人をきる事實の道に非ず、人をきるにねしてきられず、ひねりてきられず、飛てきられず、ひらいてきられず、かつて役に立ざる事也、我兵法に於ては、身なりも

心も直にして、敵をひすませゆがませて、敵の心のねちひねる所を勝事肝心也、能々吟味有べし、  
 一他に太刀の構を用る事 太刀の構へを専らにする所ひが事也、世の中に構のあらん事は、敵のなき時の事なるべし、其子細は昔よりの例今の世の法などとして、法例をたつる事は、勝負の道には有べからず、其あいてのあしき様にたくむ事也、物毎に構と云事は、ゆるかぬ所を用る心也、或は城をかまゆる、或は陣をかまゆるなどは、人にしかけられても、つよくうごかぬ心、是常の儀也、兵法勝負の道に於ては、何事も先手く、と心懸る事也、かまゆると云心は先手を待心也、能々工夫有べし、兵法勝負の道、人の構をうごかせ、敵の心になき事をしかけ、或は敵をうろめかせ、或はむかつかせ、又はお



びやかし、敵のまぎるゝ所の拍子の理をうけて勝事なれば、  
 構と云後手の心を嫌ふ也、然る故に我道に有構無構といひ  
 て、構は有りて構は無きと云所也、大分の兵法にも敵の人数  
 の多少を覚え、其戦場の所を受、我人数の位を知り、其徳を得  
 て人数をたて戦をはじむる事、それ合戦の専也、人に先をし  
 かけられたる事と我人にしかくる時は、一倍もかはる心也、  
 太刀を能構へ、敵の太刀を能受、能はるとおぼゆるは、鎗長太  
 刀を持って、さくにふりたると同じ、敵を打時は、又さく木をぬ  
 きて鎗長太刀につかふ程の心也、能々可有吟味事也、  
 一他流に目付と云事 目付と云ひて、其流により、敵の太刀  
 に目を付るも有、又は手に目を付る流も有、或は顔に目を付、  
 或は足などに目を付るも有、其ごとくとりわけて目を付ん

としては、まぎるゝ心有て、兵法のやまひといふ物になるな  
 り、其子細は鞠をける人は、鞠に能目を付ね共、ひんすりをけ、  
 おいまりをしなかもけまはりてもける事、物になるゝ  
 と云所あれば、髓に目に見るに及ばず、又ほうかなとするも  
 のゝわざにも、其道になれては、戸びらを鼻にたて、刀を幾腰  
 もたまなどにとる事、是皆髓に目付とはなけれ共、不斷手に  
 ふれぬれば、おのづから見ゆる所也、兵法の道に於ても、其敵  
 くとしなれ、人の心の軽重を覚え、道を行得ては、太刀の遠  
 近遅速迄も皆見ゆる儀也、兵法の目付は、大形其人の心に付  
 たる眼也、大分の兵法に至ても、其敵の人数の位に付たる眼  
 也、観見二ツの見やう、観の目つよくして、敵の心を見、其場の  
 位を見、大きに目を付て、其戦のけいきを見、其折ふしの強弱



を見て、まさしく勝事を得る事專也、大小兵法に於て、ちひさく目を付る事なし、前にもしるす如く、濃にちひさく目を付るによつて、大きな事をとりわすれまよふ心出きて、慥なる勝をぬかすもの也、此利能々吟味して鍛煉有べき也、一他流に足つかひ有事、足のふみ様に浮足飛足はぬる足ふみつむる足からす足など、云て、色々さつそくをふむ事有、是皆我兵法より見ては不足に思ふ所也、浮足を嫌ふ事、其故は戦になりては、必ず足の浮たがるものなれば、いかにも慥にふむ道也、又飛足を好まざる事、飛足はとぶをこり有て飛びていつく心有、幾飛も飛と云理のなきによつて、飛足悪し、亦是ぬる足はぬると云心にて、はかの行かぬるもの也、踏つむる足、待の足とて、殊に嫌ふ事也、其外からす足、色々なさ

つそくなと有、或は沼ふけ、或は山川石原細道にても、敵ときり合ものなれば、所により飛はぬる事もならず、さつそくのふまれざる所有もの也、我兵法に於て、足に替る事なし、常の道をあゆむが如し、敵の拍子に随ひいそぐ時、静なる時の身の位を得て、たらずあまらず、足のしどろになき様に有べき也、大分の兵法にしても、足をはこぶ事肝要也、其故は敵の心を知ず、むさとはやくか、れば、拍子ちがひ勝かたきもの也、又足ふみ静にては、敵うろめきありて、くづる、と云所を見つせずして、勝事をぬかして、はやく勝負つけ得ざるもの也、うろめきくづる、場を見わけて、少も敵をくづろがせざる様に勝事肝要也、能々鍛煉有べし、一他の兵法にはやきを用る事、兵法のはやきと云所、實の



道に非ず、はやきと云事は、物毎の拍子の間にあはざるによつて、はやきおそきと云ふ心也、其道上手になりては、はやく見えざるもの也、縦人にはや道と云て、四十里五十里行ものも有、是も朝より晩迄はやくはしるにてはなし、道のぶがんなるものは、一日はしる様なれ共、はかゆかざるもの也、亂舞の道に、上手の謠ふうたひに、下手のつけてうたへば、後る、心有て、いそがしきもの也、又鼓太鼓に老松をうつに、靜なる位なれ共、下手は是にもおくれさきたつ心有、高砂は急なる位なれ共、はやきと云事悪し、はやきはこけると云て、間に合ず、勿論おそきも悪し、是も上手のする事は、緩々と見えて間のぬけざる所也、諸事しつけたるもの、する事はいそがしく見えざるもの也、此たとへを以て、道の理を知るべし、殊に

兵法の道に於て、はやきと云事悪し、其子細は是も所によりて、沼ふけなとにて、身足共に早くゆきがたし、太刀はいよいよはやくきる事なし、早くきらんとすれば、扇小刀の様にはあらで、ちやくとぎれば、少もきれざるもの也、能々分別すべし、大分の兵法にしても、はやくいそぐ心悪し、枕をおさふると云心にては、少もおそき事はなき事也、人のむさとはやき事などには、そむくと云て靜になり、人につかざる所肝要也、此心の工夫鍛錬有べき事也、  
一他流に奥表と云事 兵法の事に於て、何れを表といひ何れを奥と云ん、藝によりことにふれて、極意秘傳など、いひて、奥口あれ共、敵と打合時の理に於ては、表にて戦ひ奥をもつてきると云事に非ず、我兵法のおしへ様は、始て道を學ぶ



人には、其わざのなりよき所をさせならはせ、合點の早くゆく理を先に教へ心の及がたき事をば、其人の心をほどくる所を見分て、次第く深き所の理を後に教ふる心也、され共大形は其事に對したる事、様を覺えさするによつて、奥口と云所なき事也、されば世の中に山の奥を尋るに猶奥へ行んと思へば、又口に出るもの也、何事の道に於ても、奥の出合所も有、口を出してよき事も有、此戰の理に於て、何をかくし何をか顯さん、然によつて、我道を傳るに、誓紙罰文など云事を好まず、此道を學ぶ人の智力をうかゞひ、直なる道を教へ、兵法の五道六道の悪しき所をすてさせ、おのづから武士の法の實の道に入、うたがひなき心になす事、我兵法の教への道也、能々鍛鍊有べし、

右他流の兵法を九ヶ條として、風の卷に有増書付る所、一々流々口より奥に至るまで、さたかに書顯すべき事なれ共、わざと何流の何の大事共名を書しるさず、其故は一流々々の見たて其道々々のいひわけ、人により心に任せて、それくの存分有ものなれば、同じ流にも少々の替るものなれば、後々までの爲にながれ筋共書のせず、他流の大體九ツに云分て世の中の道、人の直なる道理より見せば、長きにかたつき、短きを理にし、強き弱きもかたつき、あらさこまかなると云事も、皆へんなる道なれば、他流の口奥と顯はさず共、皆人の知るべき儀也、我一流に於て、太刀に奥口なし、搦に極りなし、唯心を以て其徳を辨ふる事、是兵法の肝心也、

正保二年五月十二日

新 免 武 藏



寺尾孫之丞殿

寛文七年二月五日

寺尾夢世勝延花押

山本源介殿

空の卷

宮 本 武 藏

二刀一流の兵法の道、空の卷として書顯はす事、空と云心は物毎のなき所、しれざる事を空と見たつる也、勿論空はなき也、有所を知りて無所を知る是則空也、世の中に於てあしく見れば、物を辨へざる所を空と見る所、實の空には非ず、皆迷ふ心也、此兵法の道に於ても、武士として道を行ふに、士の法を知らざる所、空には非ずして、色々迷有りて、せんかたなき所を空と云なれ共、是實の空にはあらざる也、武士は兵法の道を慥に覺え、其外武藝を能つとめ、武士の行ふ道少しもく

器 九 章 五 輪 書 空 卷

らからず、心の迷ふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二ツの心を見がき、觀見二ツの眼をととき、少もくもりなく、迷ひの雲の晴たる所こそ、實の空と知るべき也、實の道を知らざる間は、佛法によらず、世法によらず、おのれくは、慥なる道と思ひよき事と思へ共、心の直道よりして、世の大かねにあはせて見る時は、其身々々の心のひいき、其目々々のひずみによつて、實の道にはそむくもの也、其心をしつて直なる所を本とし、實の心を道として、兵法を廣く行ひ正しく明らかに大きな所を思ひとつて、空を道とし、道を空と見るべき也、空有善無惡智は有也、利は有也、道は有也、心は空也

正保二年五月十二日

新 免 武 藏

寺尾孫之丞殿



寛文七年二月五日  
山本源介殿

寺尾夢世勝延花押  
二二六

附 録

宮本武藏遺蹟顯彰會陳列品目録

宮本武藏遺蹟顯彰會は明治四十年五月十九日熊本市觀聚館に於て、祭典を執行し、弓削村の墳墓を展し、同時に本館にて武藏の遺墨遺品を陳列し、有志の縦覽に供せり、當日出陳の目録その重なるもの左のごとし、

一、掛物 戰氣云々	一 幅	松井敏之男藏
一、掛物 中達磨 兩脇鴨	三幅對	同
一、掛物 馬ノ畫	一 幅	同
一、木刀	一 本	同
一、自作ノ鞍輪	一 背	同
一、掛物 戰氣云々	一 幅	寺尾雲起氏藏



附		錄	
一	兵法序文自筆	一	卷
一	五輪書	一	卷
一	掛物布袋ノ畫	一	幅
一	掛物人物ノ畫	一	幅
一	掛物鶴ノ畫	一	幅
一	刀	一	本
一	木刀	一	本
一	刀ノ縁	一	筒
一	兵法卅五條自筆	一	冊
一	縁	一	個
一	掛物武藏肖像	一	幅
一	掛物獨行道自筆	一	幅

寺尾雲起氏藏

同

同

同

同

同

同

同

同

山尾左文太氏藏

同

野田三郎八氏藏

同

附 錄

一	掛物大字自筆	一	幅	同	上
一	掛物達磨ノ畫	一	幅	同	上
一	掛物鶴ノ畫	一	幅	同	上
一	掛物放駒ノ畫	一	幅	同	上
一	掛物梟ノ畫	一	幅	同	上
一	木刀大小	二	本	村上又次郎氏藏	
一	掛物鐘馗ノ畫	一	幅	牧相之氏藏	
一	掛物達磨ノ畫	一	幅	井芹經平氏藏	
一	掛物熊谷蓮性坊ノ畫	一	幅	佐田氏藏	
一	掛物雁ノ畫	一	幅	紫藤猛氏藏	
一	鐔	一	箇	大淵龍太郎氏藏	
一	刀	二	本	細川興增男藏	



一、掛物鳥ノ畫	一	幅	村上一郎氏藏
一、脇差	一	本	中山傳太氏藏
一、掛物 達磨ノ畫 玉山ノ贊アリ	一	幅	深澤新九郎氏藏
一、掛物 猫ノ畫	一	幅	小笠原宥氏藏
一、掛物	一	幅	辛島格氏藏
一、掛物	一	幅	河井熊太郎氏藏
一、掛物 武藏肖像	一	幅	故安田退三氏方藏
一、掛物 二大文字	一	幅	故長島芳次郎氏方藏
一、掛物 雁ノ畫	一	幅	長野一誠氏藏
一、掛物 人物畫	一	幅	田尻萬壽氏藏
一、掛物 水仙ノ畫	一	幅	小早川秀雄氏藏
一、小柄ノ室	一	本	幸島直言氏藏

附

録

一、縁頭小柄ノ室

一本 島田恒信氏藏

本書編述にあたりて、余が涉獵せし書目の重なるもの左のごとし、

二天記寫本

舊名武公傳、肥後八代の人豊田又四郎正剛(號ト川)その子彦兵衛正脩、その子左近右衛門景英、三代の手を経て成れるものなり、こは武藏の自話及びその逸事等を門人間に語り傳へたるもの、又は武藏の自記諸文書等より抄出して、編を成したるものなり、豊田氏は松井家の臣にて兵法を熊本の士道家平藏に學び、その奥義を極め、五代の間松井家の師範を勤めたり、ト川は寛延二年に歿したる人なり、これを二天記と改稱したるは、景英の時にして同時に宇野惟貞の序を添へたるなり、

二天記異本寫本

前記豊田本より疎雜なり、他の劍客の事をも記せり、序なし、恐くは後人の

附

録



編せしものか、

二天記別本寫本

弘化二年靜山宮本貞章の序あり、小倉に傳はるものなり、

右三書、内容各聊異同わり、豊田本を以て尤も正しとすべし、

宮本玄信傳寫本

小倉に傳はるものなり、碑文に依りて敷衍して、書成せるもの、ことし、

宮本氏系寫本

小倉宮本氏に傳はるものなり、

田住氏系寫本

播州田住氏に傳はるものなり、

作陽誌寫本

東作誌寫本

以上は、美作の地誌なり、

美作畧史刊本

津山の人、矢吹正則氏編、

新免家侍覺書寫本

横綴の帳面體のものなり、

五輪書寫本

武藏の自記なり、本編に委し、

兵道鏡寫本

同上

卅五條兵法覺書寫本

同上

二天一流兵法序寫本

同上

同註解寫本

註解者不明、肥後八代松井家臣豊田又四郎の寫し傳へたるもの、

武業雜話寫本



附

録

- 尾張の人上田英益編
- 兵術要訓刊本
- 京都の人安達正寛著
- 武談寫本
- 寺尾求馬之助道家某との問答
- 肥後金工録刊本
- 長屋重名氏編
- 武藝小傳刊本
- 一名千城小傳
- 武將威狀記刊本
- 一名碎玉話
- 榮のたふ寫本
- 寺尾家記
- 兵法大祖武州玄信公傳寫本

附

録

- 二天流兵法家紫任美矩吉田實連の話を丹治峯均入道廓巖享保十二年に算記せしものなり、本編には丹治峯均筆記として引用せり、
- 垂統大記藝術記寫本
- 水戸彰考館編纂
- 鈴木扈言寫本
- 平山子龍の算録なり
- 羅山文集刊本
- 屏山文集寫本
- 兵法二天一流相傳記
- 志方半兵衛の記なり、
- 吉岡傳刊本
- 福住道佑著史料叢書に收む、
- 畫乘要略刊本
- 古畫備考刊本



- 近世逸人畫史刊本
- 本朝畫纂刊本
- 花笈巖流島刊本
- 二島英雄記繪入刊本
- 敵討宮本武藏傳刊本
- 宮本武藏遺蹟顯彰會蒐聚諸記錄
- 書翰覺書日記類
- 矢吹氏筆錄
- 矢吹正則氏の筆錄なり、
- 武藤氏雜錄
- 武藤巖男氏の雜錄なり、
- 原田氏雜錄

明治四十二年四月二十四日印刷  
 明治四十二年四月二十七日發行

定價金壹圓

宮本武藏



宮本武藏遺蹟顯彰會編纂

發行兼  
印刷者

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者社長 原 亮 三 郎

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發賣所

東京市日本橋區  
本町三丁目

振替貯金口座  
八八一五番

金港堂書籍株式會社



廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校

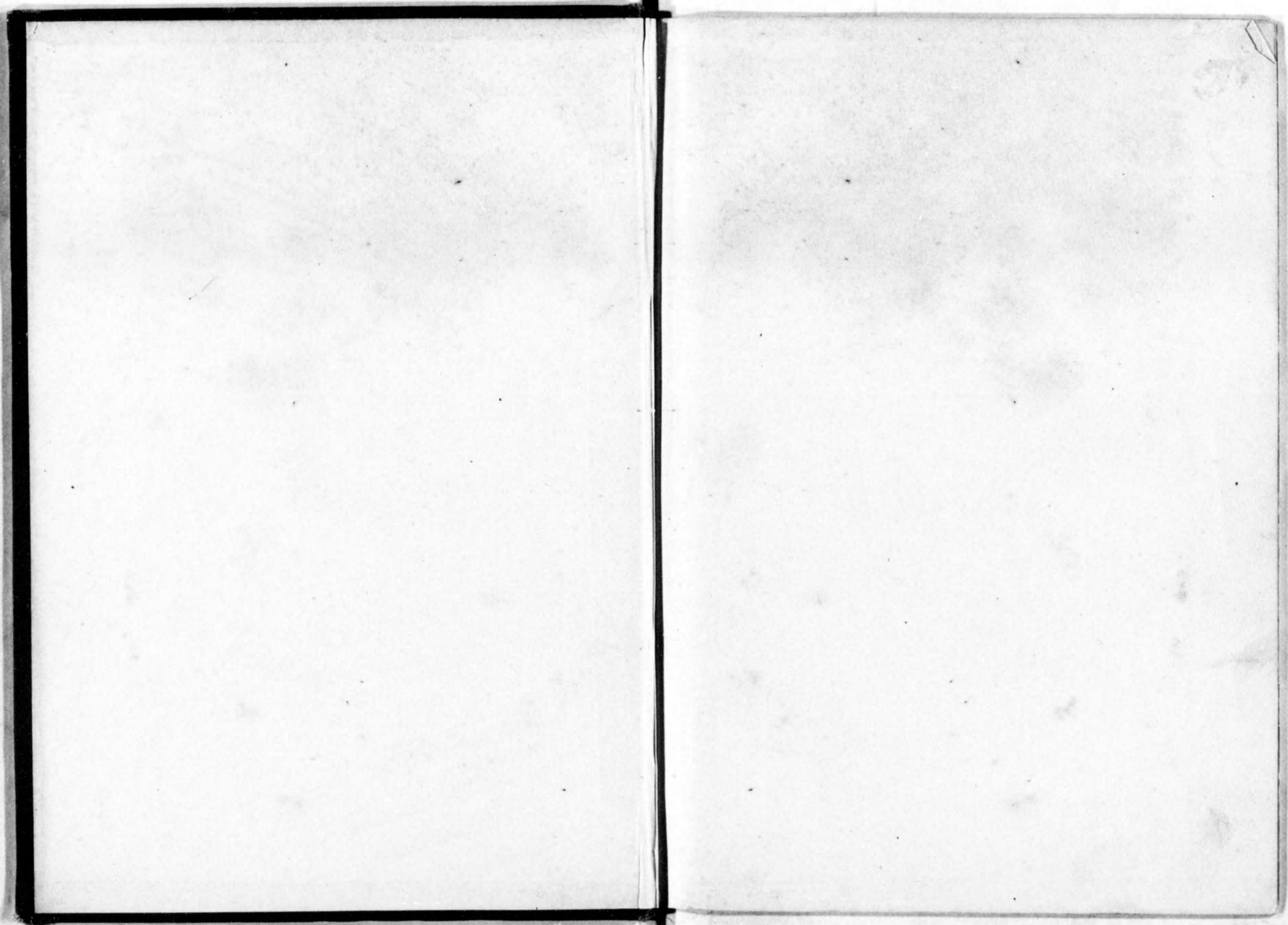
廣東省立第一師範學校



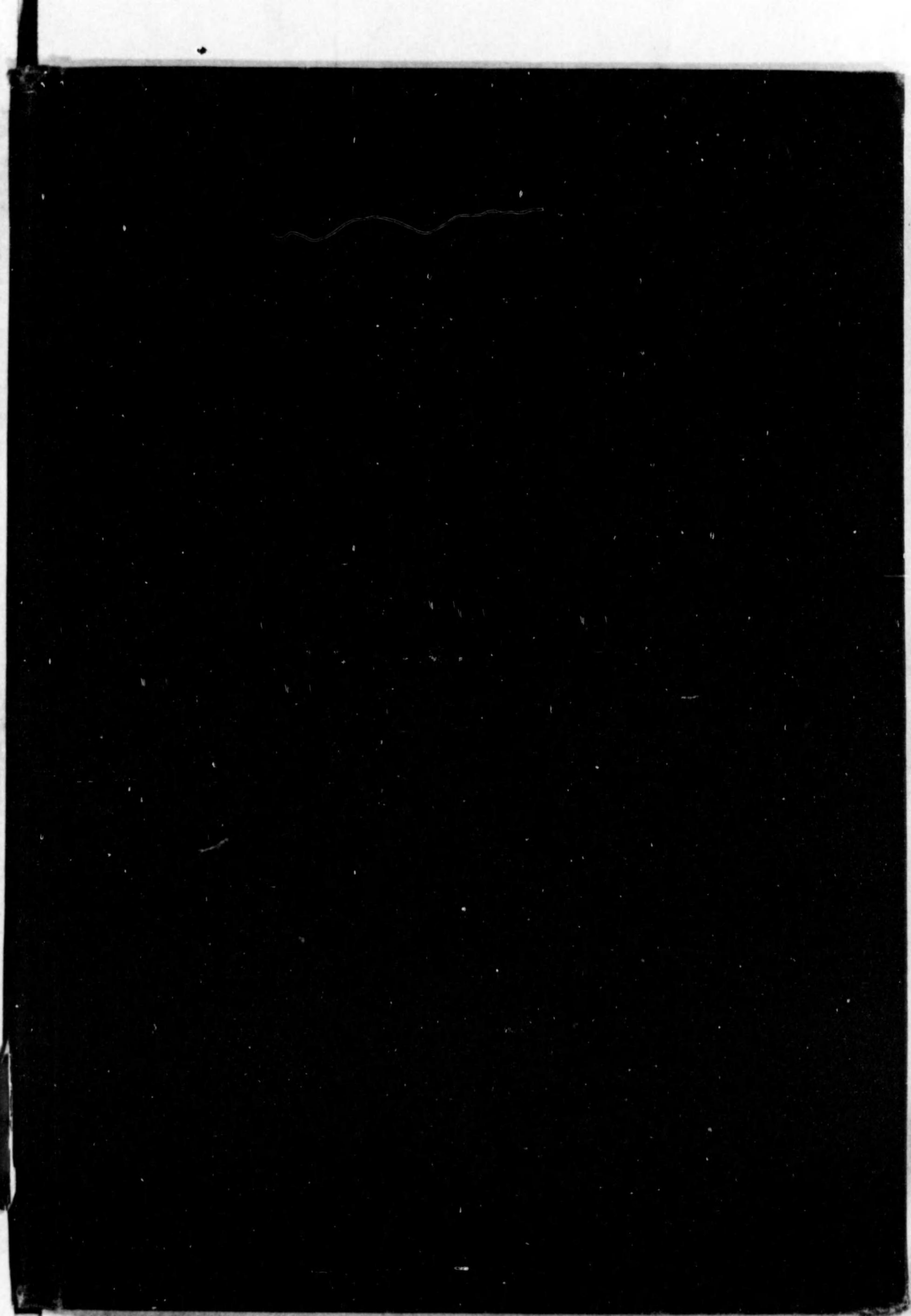
廣東省立第一師範學校

廣東省立第一師範學校











289.1

M634M<sub>m</sub>



007404-000-7

289.1-M634Mm

宮本武蔵

宮本武蔵遺跡顕彰会

M42

ACK-1231







一般資料



